

西洋中心主義の破綻

——ハンチントンの「文明の衝突」を評す——

金 観 濤

監訳 池 田 誠

少し前、アメリカのハーバード大学のハンチントン (Samuel P. Huntington) 教授が、『フォーリン・アフェアーズ』誌上に「文明の衝突」という長文の論文を発表し、「文明の衝突」が今後の国際政治を左右する主要な要因となるという考えを打ち出した。かれは、もし第3次世界大戦が起こるとすれば、それは異文明間の戦い、すなわちキリスト教文明、儒教文明およびイスラム教文明の境界線が今後の戦線となるであろうと言うのである。冷戦の終結とともに、共産主義、資本主義というイデオロギー対立が消えたいま、人類はどこに向かってゆくのか、このテーマは、現在、世界各国の知識人たちが問いかけている最大の問題であり、同論文は、発表されると直ちに広範な注目を引いた。表面的には、ハンチントンの論文は、西側の覇権主義に満ちており、西洋中心主義の産物のように見える。しかし、アメリカの外交戦略に対する提言（ハンチントンは露骨にアメリカの国益を重視する立場をとっている）を注意深く読み、とりわけ我々がどこに位置づけられているかということに注意して読むと、この文明衝突論の理論的基礎、とくに西洋中心主義は、取りも直さず人類文明の中心としての西洋文明が破綻に向かいつつあることを前提にして立論され

ていることがわかるのである。

方法と論拠との矛盾

ハンチントンは、人類の文明の長期的展開において21世紀を展望している。すなわち、17世紀以前、西欧文明は世界の多くの地域的文明の一つであった。その当時の世界秩序は、キリスト教、儒教、イスラム教などの諸文明間の関係によって成り立っており、国際的衝突というのはすなわち諸文明間の衝突といえることができる。17世紀以降、西洋文明が人類の文明の主導的地位を占めるようになり、それとともに、これまでの世界秩序を形成する主動力であった東西文明の関係という要素も後退し、西洋の強国間の関係が主たる国際秩序の担い手となったと言うのである。かれは、18世紀のフランス革命以後の近代ナショナリズムの出現、19世紀になって国民国家が国際政治の角逐における主人公となったこと、および20世紀のマルクス・レーニン主義やファシズム、自由主義などのイデオロギー間の全地球規模における対抗、これらすべてが実質的には西洋文明内部の衝突の異なる形態に過ぎないことを証明しようとしているのである。

しかし西洋文明が一旦その絶対的優位から後

退すると、世界秩序はもはや西洋文明内部の諸要素によっては決定され得なくなる。近年の欧米諸国の経済的沈滞と東アジアの経済発展とは、明暗を分かťこと大なるものがある。とりわけ中国大陸の経済成長は目を見張るものがあり、ハンチントンをして西洋文明の優位が失われたあとの世界の枠組みについて、21世紀の世界は、かつて歴史上長期にわたって存在した東西文明の衝突が再び主流を占めると考えさせるにいたったのである。

ハンチントンが挙げている文明の衝突の六つの論拠は、次の三つにまとめることができよう。まずその第1は、文化の相違は経済発展や東西文明の交流によって縮まることはなく、それとは全く逆に、異文明の接触は、かえってそれぞれの文化のアイデンティティを高めること。第2は、文化的アイデンティティは一貫して国民国家の意識を凌駕するものであって、イデオロギーは変わることもあり、超大国も崩壊するが、文化は歴史的産物であり、人種の違いはなおのこと変え難いのであり、近代化の動きと並行してルーツを探ろうとする動きが起これ、原理主義および地域主義が高揚すること。第3は、経済的協力とそれに基づく秩序の形成は、共通の文化的基盤に基づくものであり、文化的差異と断絶は、異なる地域間の経済的なまとまりを阻害する傾向があること、である。

ハンチントンは、西洋文明の絶対的優位の喪失および各文化圏内部でのアイデンティティの強化という二つの趨勢から推し量り、東西文明の衝突は避けられないという結論を打ち出した。

その論証の過程は、一見非の打ちどころのないように見えるが、しかし厳密に分析すると、その論理のなかに幾つかの隠れた食い違いがあることに気がつく。それは方法と論拠との間の矛盾である。ハンチントンの用いているのは歴史学の方法であり、社会の長期的変遷に基づいて議論を展開している。しかし彼が文化的アイデンティティの強化の論拠として提示しているのは歴史的事象ではなく、現代社会の観察から抽出された幾つかの「事件」ばかりである。20世紀のアナール学派や「新しい歴史学」の主たる貢献は、歴史の発展における中長期的要素(La Longue duree)と「事件」とを区別して考えることであった。フェルナン・ブローデル(Fernand Braudel)によれば、『「事件」は偶発的におこるもので、……その衝撃は同時代の人びとの意識に強い影響を与えるが、それは長くは続かず、人びとはしばしの間、その爆発による炎を見ているに過ぎない」⁽¹⁾ということになる。歴史発展の長期的変動は、果たしてハンチントンの言うような方向と合致しているであろうか？ 上に挙げた三つの論拠を世界史の流れのなかに置いてみると、そこで得られるのは、かえって「文明の衝突」とは全く違ったものとなるのである。

文明の変遷の長期的趨勢とは何か

まず第1に、異なる文明間の交流は、その文化的差異を拡大しているのか、または縮小させているのか？ このことは短期的な観察によっ

(1)金観濤の引用文によって訳したが、井上幸治訳編『フェルナン・ブローデル』(1989)第1章「長期的持続——歴史と社会科学——」(20頁)では次のように訳されている。

……事件とは、突発的なもの、16世紀の表現を使え

ば、「衝撃的ニュース nouvelle sonnante」である。それは、目をくらませるような煙で同時代の人々の関心を奪うが、長続きすることはほとんどなく、その火炎が見えることはめったにない。

ては結論を出しえない問題である。しかし、もし世紀を単位として見るならば、異なる文化間での相互影響はそれぞれの自己認識を強化したのではなく、むしろその逆に、文化的アイデンティティの危機および相互影響のもとでの文化の融合変化が起こってきたことがわかる。ハンチントンはトインビー (Arnold J. Toynbée) を引用して、「世界には21の文明があったが、そのうち現存するのは六つある」⁽²⁾ と言っているが、トインビー自身が、これらの異なる六つの文明自体、文明相互の接触によって融合した結果であるとしていることには、かれは一言も触れていない。トインビーは、歴史上高等宗教が出現した場所は、しばしば異なる文明がもっとも頻繁に接触しあった場所であったことを発見した。かれの理論体系では、高等宗教は文明が滅びたのちの代替物なのである。

ここには明らかに、文明と文明とが接触した結果、それらの文明の融合が起こったという結論が含意されている。トインビーの歴史哲学は、多分に思弁的なところがあり、現代の研究者には余り引用されていない。しかし17世紀以降の東洋文明と西洋文明との接触により、次に述べるような二つの傾向が見られるようになったという点については、学界の見解はほぼ一致している。その一つは、東洋の国々が近代化する過程で、文化のかなりの部分が西洋化してきたということである。もう一つは、東洋文明自体が、ウェスタン・インパクトのもとで変形しているということである。ハンチントンが現代の中国大陸、台湾、香港を現在もお儒教文化であるとしているのは甚だ納得のいかないことである。儒教的秩序は、早くも19世紀に、中国が西洋文

明と歴史的な出会いを果たすことによって次第に解体し始めた。今日、この三つの地域の文化は、中国の伝統と西洋文化の融合の結果である。香港はもっとも西洋化されている地域であり、大陸と台湾においても、かつて主導的な地位を占めた政治文化、すなわち毛沢東思想と三民主義は、いずれも程度の差こそあれ中国の伝統と西洋文化とが融合した結果にほかならない。

第2には、民族、文化および国民国家の三つのアイデンティティのうち、いずれがもっとも有力であるかという問題である。今日の世界における幾つかの有力な文明は、みなヘゲモニー国家の成立以後に出現したものであり、それぞれの文明の形成は、いずれも文化的アイデンティティが狭隘な民族的アイデンティティを凌駕することを前提としていた。歴史的視野を広げると、次のような基本的傾向が見て取れる。すなわち、ヘゲモニー国家の成立以降は、文化的アイデンティティが民族的アイデンティティに勝る時代であり、また17世紀以降の伝統社会の近代化に伴い、文化的アイデンティティはさらに国民国家的アイデンティティに取って替わられたのである。中国文明を例として言えば、すでに2千年も前から、中国人は文化的アイデンティティによって民族および血縁の違いを乗り越えて、道徳文化的価値が民族的アイデンティティに勝る「華夏」中心主義（華夷思想）的心理状態を形成してきた。もし文化的アイデンティティが民族的アイデンティティより上位に置かれていないならば、中華民族は、2千年ものあいだの統一と連続を維持することはできなかったであろう。しかし文化的アイデンティティをもって国民国家のそれに代用することは、近代

(2) ハンチントンは、Toynbée: "A Study of History" を引用書として挙げているが、引用の箇所を具体的に示しておらず、また同書では随所で文明の生成発展

と衰退について論じているので、ハンチントンが言及した箇所は特定できない。

化の要求と矛盾していた。したがって中国は、19世紀のウェスタン・インパクトのもとで、文化的アイデンティティを機軸とするナショナリズムから、国民国家を志向する近代ナショナリズムへと展開したのである。19世紀末から20世紀初めにかけて、中国にも排満主義を基調とする民族的ナショナリズムが出現したことがあった。しかしそれは、儒教イデオロギーが解体し、文化的ナショナリズムが近代ナショナリズムへと転化してゆく過程での過渡的産物に過ぎず、きわめて不安定なものであった。このことはまさに、ハンチントンの挙げる今日の民族的アイデンティティの強化という現象もまた、イデオロギーの解体過程における、短期的な現象に過ぎないものであることを我々に想起させるのである。

経済の一体化は、同一文化圏内においてのみ可能であるとするハンチントンの観点は、疑いもなく二つの現実に触発されてのことであろう。すなわち一つは、中国大陆、香港、台湾、シンガポールなどが、近年、経済的連携を強めていること、しかも大中華経済圏といったものを形成しつつあることである。そしていま一つは、今日のアメリカと日本との経済的矛盾が、アメリカとヨーロッパとの矛盾よりも大きいことである。しかしこれには二つの問題がある。一つは、文化的同一性は経済的統合に役立つのかどうかということであり、もう一つは、文化的同一性が経済衝突の緩和に役立つかどうかという問題である。この問題についても、やはり長期的な歴史の展開を念頭において考えるならば、ハンチントンの概括が誤っていることがわかる。

文化的に分類すれば、中国と日本とはある

種の類似点があり、中国と日本の文化を共に「儒教文化圏」に一括する人が少なくない。しかし近代化の過程で、両国の経済は協調的ではなかったばかりでなく、強烈な対抗関係すら生じた。今日の中国大陆、香港、台湾、シンガポールが形成しようとしている大中華経済圏の構想も、文化の同一性というよりも、経済の形態と発展の程度を基盤としてその協力関係が成り立っていると考えたほうがよい。また、異なる国家および利益集団間に経済的利害の対立が生じた場合、文化の共通性がそのような経済的矛盾を緩和する作用を果たしているかと問いかけた場合、20世紀の世界史は、まさにその反証となる直接的な事例を我々に提供している。すなわち、今世紀の二度の世界大戦は、主要には似通った文化をもつ西洋国家の間で起こっているのである。1870年から1910年に至る40年間、イギリスの工業総生産の増加は2倍であったのに対して、ドイツでは5倍近くにまで成長した。それに伴い、それまでイギリスの経済力を中心としていた市場秩序は、急速に近代化したドイツの挑戦を受けることとなった。カール＝ポラニー（Karl Polanyi）の言葉を引用するなら、20世紀初期のファシズムと保護主義の台頭および第2次世界大戦は、実質的には、文化や社会の秩序が、急速に拡張する市場の論理にとって替わられた結果である⁽³⁾、ということになる。このことは、文化の同一性は、経済的な協調には役立たないことを示しているのである。

もし我々が現象面に捉われずに、歴史の長期的発展を支配する原動力に注目するならば、この文明の衝突論の破綻はおのずから明かとなる。最近3百年来、伝統的な農耕文明の世界秩序が

(3) Polanyi: "The Great Transformation — The political and Economic Origins of Our Time —" (1957) (吉沢英成等訳『大転換 — 市場社会の形成と

崩壊 — 』)の主として第1部に同様の内容が論じられている。

解体したのは（ハンチントンの言葉を借りれば、文明の衝突が西洋内部の衝突に取って替わられたのは）、西洋が、いち早く伝統から近代への転化をなし遂げたからである。西洋の近代化の優勢は、他の文明をウェスタン・インパクトのもとに曝すとともに、他文明も同様に伝統から近代への歩みを始めるよう迫った。たとえ今後、もはや西洋文明の絶対的優位性が失われ、また国際秩序が異なる文化を有する近代社会によって左右されるにしても、これらの国家間の衝突は文明の衝突であるなど言うことはできない。ハンチントンの議論は本末転倒で、「近代化」というこの共通の要素を欠落させ、近3百年來の人類の発展の基本的な原動力を否定しているのである。

近代社会における多元的文化

ハンチントンはアメリカ政治学界の権威であり、恐らく上述した問題点にも明快な解答を準備しているかもしれない。またかれが、しばしば現在学界で一般に認められている様々な観点を無視しているのは、現在の社会科学の理論的傾向に不満を持っているからかもしれない。今日の学界において、近代社会への変容を扱った理論は、近代化論にせよ、世界システム論にせよ、近代化の過程の共通性に力点を置き、とりわけ西洋社会における伝統から近代へというモデルを全人類に敷衍しようとしている。このような暗黙の西洋中心主義には、必然的に一つの落とし穴がある。それは固有の文化の軽視である。西洋文明以外の独自の文化や歴史が形成する独自の組織形態、またその近代化の在り方については、まだ深く立ち入った研究は為されていない問題である。近年、東アジアに出現しつつある社会は、明らかに西洋社会とは異なるが、

これも近代社会の一つの存在形態なのである。近代化論も世界システム論も、決して20世紀後半のこの大きな変動を説明できないし、また将来を展望する力もない。従ってハンチントンがいま文明の衝突論を提起したのは、前述の西洋社会科学の主流に異議を唱えたかったからかもしれない。

ハンチントンは、近代化は西洋化とは異なることを敏感に捉えている。西洋社会とは異なるタイプの各種の近代社会が存在しうべきばかりか、現に存在しているのである。17世紀以前の異文明間の断層線は、いまなおこれらの異なった類型の近代社会を区分する境界となっている。またかれは、異なる文明が近代化への過程をたどる場合、それぞれ固有の深層構造を持っており、それは「近代化」によっては変わらないとしているが、これはまことに非常に優れた卓見であると言えよう。しかしそれにも拘らず、上述のように、文明の衝突という論点についてはやはり賛成できない。

文明の衝突論は、一つの基本的な仮説によって成り立っている。それは、20世紀末以前数百年間の世界の衝突を、西洋内部の衝突であると見なす考え方である。この前提を承認して初めて、西洋文明の絶対的優位性の喪失が、文明間の衝突につながるという論理が成り立つのである。しかしもし文明の深層構造が近代化によって変えられないということに同意するならば、東洋文明は西洋文明とは異なる近代社会形態と近代化の過程を持つことになり、したがって17世紀以降2、3百年間の世界の衝突、とくに20世紀のイデオロギーの対立もまた、簡単に西洋文明内部の衝突とは見做しえないことになるのである。ロシアがマルクス主義を受容し、それをレーニン主義とスターリン主義に変化させて西洋と対立したことは、ロシア正教とビザンチ

ン文化の伝統と関連があるのではないであろうか？ 毛沢東思想や中国的社会主義の道は、中国の伝統的政治文化モデルの一種の近代的変種と言えるのではないか？ もしそうであるとするならば、世界の近現代史は書き換えなければならない、今後の世界の衝突と近3百年来の衝突とを区別するハンチントンの考え方も破綻することになるのである。

文明の衝突論には、このようにその理論構造の深層において数々の自己矛盾がある。ハンチントンは、一面では、近代化は西洋化ではないと強調しながらも、同時に他の文明に対する西洋文明の優位性を暗に肯定し、西洋文明の指導下においてのみ近代の国際的秩序が成り立っているのである。しかしながら、近代化の過程とは、元来、個別の文化や社会を超える理性的社会を打ち建てようとする過程であり、近代社会においては、人びとには価値選択の自由があり、文化の多元性は社会秩序を破壊するものではない。この点を国際関係に援用するなら、各民族がみな真の近代社会に発展したときには、そこには多元的な文化を許容しながら、しかも諸文化間の緊張関係の起こらない国際社会が出現するであろうことが予想される。ハンチントンもその長論文の最後の部分で、重要なのは、今後、異なる文明間の共存の在り方を学ぶことである、と締めくくっている。しかし全編を通読すると、かれの文明の衝突論は、何らの論証を加えることなく、異なる文化によって構成される近代社会は、必ず相互の衝突を免れないとしており、それは、かれが近代社会のシステムそのものに希望を失っているというよりも、かれ自身が依然として西洋主導の近代社会を心中に描いていることを示している。かれは多元的な文化の花園には、必ず西洋文化の造園師がいなければならない、西洋近代の強国がなお、世界

秩序維持のための警察とならなくてはならぬと考えているのである。

ハンチントンは、一面では西洋中心論が破産しつつあることを認めながら、しかしその意識の深層では西洋中心論から抜け出せずにいるのであり、この苦境は明らかに一種の普遍的な昏迷を反映している。それは、西洋文明が人類の中心的地位を失いつつあるのみならず、西洋の学術や西洋の歴史的経験を基礎とした理論までもが、その正当性と覇権的地位を喪失しつつあるという状況によるものである。その昏迷のなかで、人類はいまや新しい時代を再び模索しようとしているのである。

(深尾葉子訳並に訳注)

付 記

ここに訳出したのは、香港刊行の『二十世紀』誌1993年10月号(総第19期)に掲載された金観濤「西方中心論的破滅——評全球文化衝突論——」の全訳である。同号には、Samuel P. Huntington: "The Clash of Civilizations" の中国語訳を巻頭に、同論文に関する金観濤論文を初め、劉小楓「利益重於文化」、陳方正「論中国民族主義與世界意識」など数編の論評が掲載されている。なおハンチントン論文の邦訳は、『中央公論』1993年8月号に「文明の衝突」の表題で掲載されている。

ハンチントンは、政治学および国際政治学の領域で多くの業績を発表しているが、ハーバード大学ジョン・オリン戦略研究所の所長を務め、また国家安全保障会議(NSC)のコーディネーターとなったこともあり、アメリカの外交、とくに軍事戦略の決定に深く関わっている。論評の対象となったこの論文は、1993年、"Foreign Affairs" 夏号に掲載されたものであるが、そ

の内容が冷戦終結後の世界観の構築にかかわる斬新かつ意欲的なものであったこと、しかもそれがアメリカ政府の政策決定に影響力を有する人物によって書かれたものであったことなどから、アメリカ国内は言うまでもなく、各国の国際関係や歴史学の研究者および評論家たちの反響を引き起し、また論争を招いた。

このハンチントン論文については、すでに多くの論評が発表されているが、その主要な論点をここに列挙しておこう。

1. 冷戦終結後の世界の国際政治上の大勢は、融合と安定の局面であり、ハンチントンの挙げる種々の紛争や国家間の衝突は、全体から見れば局地的なものにすぎず、このような時期に対立的局面を助長するような議論は、いたずらに危機感を煽るのみで適当でないとするもの。
2. 国家は、最終的には自己の利益（国益）に従って行動するものであり、文明圏などという曖昧な親和力によって戦時の協力相手や武器の輸出先を選ぶものではなく、儒教圏とイスラム圏の武器取引といった相互依存関係などの幾多の事例は、文明原理による相互排除の論理によっては説明できないとするもの。
3. 如何なる地域の国際関係を理解するにも、文明区分はあまりに大雑把すぎて意味をなさず、「文明」というものも、現代社会においては極めて恣意的に国家の政策意図に

よって操作されうるものであるとするもの。

4. 西欧的価値がもはや一方的には貫徹しえないことを強調するあまり、西欧文化や近代化の過程が他の文化に与えている絶大な影響力を過小評価し、いたずらに非西欧的原理とそれによる凝集力の強化を訴える結果となっており、それは表面的には文化の相対性に基づく各国の相互理解を説きながら、むしろ深層における西洋中心主義の危機意識の現れであるとするもの。

ここに紹介した金観濤論文の論調は、この第4の論点に位置づけられると思うが、その詳細は訳文によって判断していただきたい。

なお金観濤氏は、現在、香港中文大学中国文化研究所の当代中国文化研究中心の研究員であり、劉青峰との共著『中国社会の超安定システム——大一統のメカニズム——』（若林正丈等訳、1987年 研文出版）などのシステム論的な歴史考察によって注目されている。また『二十一世紀』誌も、香港中文大学中国文化研究所を拠点として出版されており、中国内外の知識人に討論の場を提供して、香港における一つの知的空間を形成していることを指摘しておきたい。

また訳出に当たっては、「文明」と「文化」の使い分けについては、できるだけ原文に忠実に、「西方」と「東方」、「種族」と「民族」の使い分けや「現代化」などの用語については、日本語訳の慣例に従って訳出した。

